一橋大学機関リポジトリ
HERMES-IR
Hitotsubashi University Repository

Title	小学校の社会科教科書の語彙と表現 ： 日本語能力試験レベル及び外国人児童教育のための日本語教科書との対照
Author(s)	西谷，まり
Citation	一橋大学留学生センター紀要，3：79-93
Issue Date	2000-10-31
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	publisher
URL	http://doi.org/10.15057/8593
Right	

Hitotsubashi University Repository

小学校の社会科教科書の語彙と表現

日本語能力試験レベル及び外国人児童教育のための日本語教科書との対照

西谷　まり

要旨

社会科の教科教育の内容理解を促進する日本語教科書の作成を目指して、小学校３、４、５年生の教科書に現れている語彙と表現の出現頻度と、日本語能力試験及び児童用日本語教科書との相関について調査を行った。日本語能力試験との関係では最もやさしい４級レベルのものの出現頻度が最も多く、次いで多いのが３級レベルであったが、高度な２級、１級レベルの語彙表現も見られた。児童用の日本語教科書との関係については、社会科の教科書の出現頻度の高い語彙と表現がほぼ網羅されている教科書と、ほとんど提出されていない教科書があり、語彙・表現がほぼ網羅されているものでも、社会科の教科内容理解にとって効率のよい提出のされ方は必ずしもなされていないことが明らかになった。

キーワード　外国人児童、社会科、日本語教育、語彙、表現

１．研究の目的

1997年の文部省の調査によれば、日本語指導が必要な外国人児童は、全国3,402の小学校に12,302人在籍している。中学校・高等学校の生徒まで含めると17,296人となっていて、2年前の調査時と比較して約1.5倍の伸びを示している[1]。ここで問題となるのは、これら外国人児童は日本語だけを学習していればよいというわけではなく、同時並行して、教科の学習を進めていかなければならないことである。外国語の習得にかかる時間は、トロントの補習校の調査（中島和子1998）によれば、会話力ではネイティブのレベルに達するのに平均２～３年であるが、教科学習に追い付いていく読解力、語彙力がネイティブのレベルに達するのには平均４～５年かかっている。日本の教育現場においては、児童の滞日年数が長くなるにつれて、会話の上達と反比例して教科学習における日本語の不十分さがめだってくると言われている。

文部省作成の児童用日本語教科書『日本語をまなぼう２』の教師用指導書（1994）にも「算数・理科・社会などの教科の場合、日常生活ができるようになった程度の日本語の力では日本人児童と一緒の授業についていくことは難しい」と述べられているが、「『日本語をまなぼう２』は、学習言語能力を身につけるための教材として作成されたものである」としながらも、「社会については、算数・理科と比べて、教科で扱われる範囲が広く、必要

1　公立の小中学校全体で見ると、外国人児童生徒の母語は53言語に及んでいるが、その内訳を見ると、ポルトガル語が全体の44.2%、中国語が29.7%、スペイン語が10.2%で、この３つの言語が全体の８割近くを占めている。

とされる語彙が多いといった理由から…極めて限定的にとりあげるに止めてある。」と述べられている[2]。

筆者は1997年に外国人児童の教室観察を約１年間続けたことがある。観察対象者のうち、小学校４年生の中国人児童は、算数については問題がなかったが、社会科にはかなり苦戦していた。社会科の教科書の内容は日常生活と密接に結びついているものも多く、それだけに、日本人児童にとっては当たり前のことでも、外国人児童には馴染みが薄いものである。しかし、逆に言えば、日常生活に密着したものであるからこそ、社会科において扱われる語彙・表現の習得は外国人児童にとって欠くことのできないものだと考えることができる。そこで今回の調査は社会科の教科書をとりあげ、語彙・表現について調査を行うことにした。

東京外国語大学に設置された「外国人子女の日本語指導に関する調査研究協力者会議」がまとめた「外国人の児童生徒のための日本語指導」（1998）の第２分冊『算数（数学）・理科の教科書―語彙と漢字』では、算数（数学）・理科の教科書を調査する目的として以下の３つを挙げている。

(1) 教科教育に結びつきやすい日本語教育を考える際の基礎資料を得る。
(2) 文法項目が学年別でどのように現れているか、その分布・様相を知る。
(3) この基礎資料から得られる文法項目と語彙項目を日本語カリキュラム・ガイドラインおよび日本語力評価方法試案上に反映させる。

本稿では、上記の目的のうち（1）と（2）を中心とし、語彙・表現の出現頻度、学年別の分布を調査した上で、日本語能力試験の出題基準及び児童用日本語教科書との関連について考察する。もとより、日本語能力試験は成人学習者向けの試験である。３・４級は成人学習者対象の日本語教科書から、１・２級は日本語教育、学校教育、一般社会の語彙・表現から選定されている。そのため、児童の日本語教育と直接結びつくものとは言えないが、語彙・表現の難易度を測る基準の一つとしてとりあげた。しかし、それだけでは日本語教育との関連を見るには、不充分であるため、児童用日本語教科書の語彙・表現との関連を併せて調べることにしたのである。

２．調査対象資料と調査方法

本稿では、３年生から５年生までの社会科教科書14冊を調査対象とした。対象とした教科書は、東京書籍、光村図書、日本文教出版株式会社、教育出版、大阪書籍から出版され

2 『日本語をまなぼう２』が４年生までの教科の内容を素材としているのに対して、『日本語を学ぼう３』は５、６年生の教科内容を主体としている。この教科書においても、算数が13課分、理科が９課分であるのに対して、社会は５課分の内容しかとりあげられていない。

3 ６年生の教科書は歴史・国内国際政治を扱い、中学の学習への橋渡し的内容になっており、３年生から５年生までの教科書とは内容も構成もかなり異なるので今回の調査では除外した。

た平成11年度用の検定教科書である。それぞれの学年で同じ内容を扱っている１単元ずつをとりあげ、語彙と表現について調査を行った[3]。

調査にあたっては、まず、教科書の対象部分の本文と年表、写真のキャプション等のすべての文字を入力対象とした。さらに、一定の基準に沿って分かち書きを行い、一橋大学作成の頻度計算プログラムにかけて、出現頻度を計算した。出現頻度は延べ語数で計算してある。日本語能力試験との対照には、『日本語能力試験出題基準』（国際交流基金、日本国際教育協会　1994）を、児童用日本語教科書は『ひろこさんのたのしいにほんご１、２』（以下『ひろこさん』と表記することもある）および、前述の『日本語をまなぼう　１、２、３』（以下『まなぼう』と表記することもある）を使用した[4]。

３．教科書の構成

どの教科書会社のものも、概ね各単元の構成は同じである。まず、その単元で学ぶべきことが提示され、次に子供たちが自ら出かけてインタビューなどの調査を行い、それを基に討論をする。そして、子供達たちが学習項目をまとめて発表して、理解を確認するという順番になっている。

教育出版の『社会　３上』２章「市のひとたちの買いもの」の部分を見ると、まず、「えり子さんの家ではいろいろな店で買いました。」「けん太くんはスーパーマーケットに行って、買ってきた。」ことをきっかけに、「えり子さんは～を疑問に思いました。そこで、～についてしらべることにしました。」、そして「３年２組のみんなは～をしらべてみました。」と続き、調査の結果をもとに、「みんなで～について話し合い」「買いもの地図をつくってみることにしました。」と続く。その結果「～ことがわかりました。」と理解すべきことを提示し、「みんなで表にまとめることにしました。」という作業が続く。そして、今後の学習につなげるために、「わたしたちは～をくわしくしらべてみたくなりました。」と結んでいる。

東京書籍『新編　新しい社会３上』３章の「わたしたちのくらしと商店」では、最初から調査をし、次に理解した部分と疑問点「けれども、わからないことが出てきました。～についてしらべることにしました。」と続く。さらなる調査と理解を繰り返し、最後にまとめを提示している。光村図書の同じ内容の単元は初めに「家の人たちはどんなものを買っているのでしょうか。」と疑問を投げかけ、調査を行った結果、「買い物日記を表にまとめました。」となり、最後は視覚的に「地図に書きこんでみました。」「グラフにあらわしてみました。」という作業のあとで、それを「発表しました。」という形で結んでいる。日本文

4　『ひろこさん』は、文型積み上げ式の教科書、『まなぼう』は学校場面と教科学習を意識した場面シラバス、教科内容中心主義のコンセプトに基づいた教科書で、どちらも小学生の日本語指導において頻繁に使用されているものである。

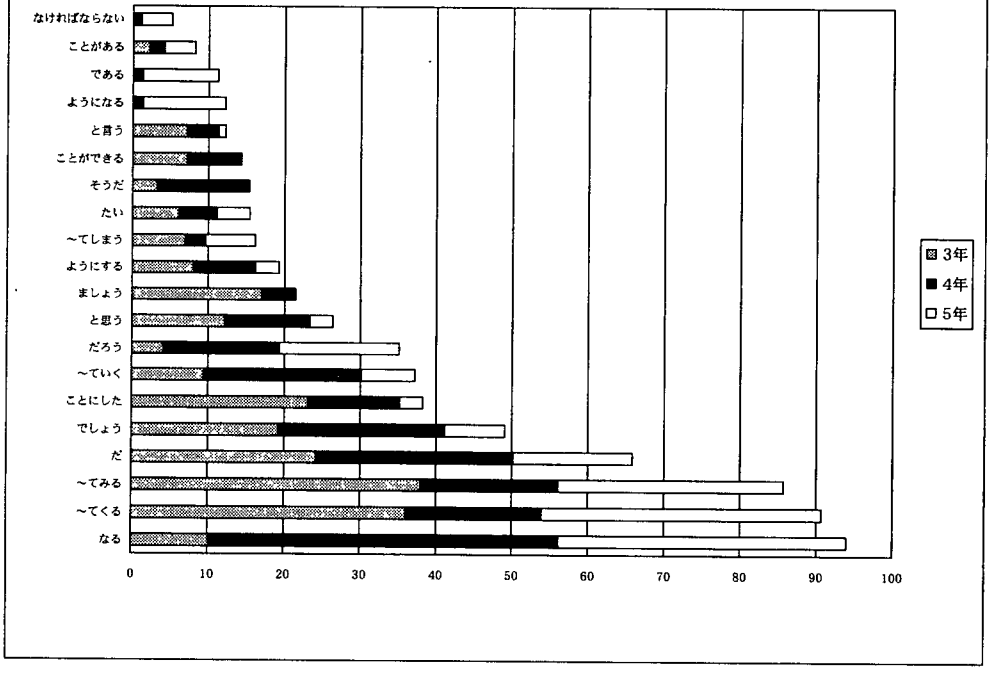
教出版では、調査、疑問、調査、発表、まとめ、の順番になっている。

それでは、これから社会科教科書で使われている語彙・表現について、「文末表現」「動詞」「名詞」「形容詞（形容動詞）及び副詞」「助詞相当句」「接続詞」「疑問詞」「助詞」の順で細かく見ていくことにする。

４．文末表現の特徴

ここでとりあげた文末表現は、いわゆる文型として日本語教科書でとりあげられているものである。出現している文末表現は多岐にわたっているが、出現頻度20位までの表現は日本語能力試験の４級レベル、３級レベルにおさまっている。各学年ともに、３級レベルのほうが多くなっている。また、出現頻度上位10位までの表現は各学年均等に出現しているものが多い。上位20位までの動詞の学年別の内訳を図１に示す。

図１　文末表現の出現頻度



変化を表すものが「なる」「～てくる」「～ていく」「ようにする」「ようになる」「ことにする」「ことになる」の7つで大きな割合を占めている。「でしょう」「だろう」「ましょう」「たい」「そうです」は話し手の主観的な心情、つまりムードを表している。

先に述べたように各単元の構成は「スーパーマーケットに行って買ってきた」ことをきっ

かけに、「調べることにしました。」そして、実際に「～をしらべてみました。」「買いもの地図をつくってみることにしました。」「くわしくしらべてみたくなりました。」となっている。そのため、「てくる」「てみる」「ことにした」といった文末表現は社会科の学習を進めるうえでキイとなる言葉のために、頻度が高くなっている。

中尾（1999）では、小学校の主要５教科の教科書調査の際に、日本語能力試験出題基準の３級、４級レベルと『ひろこさん』『まなぼう』に出現する「初級の文末表現にほとんど差がないことがわかった」としている。ところが、今回行った両教科書との対照では、『まなぼう』では半数以上が第一分冊に、その他も第二分冊に提出されているが、『ひろこさん』のほうは第二分冊まで勉強しても出現頻度20位までの表現のうち14の表現しか学習できないことがわかった。10位までに現れる「てみる」「ことにした」「ていく」「だろう」が未提出である。

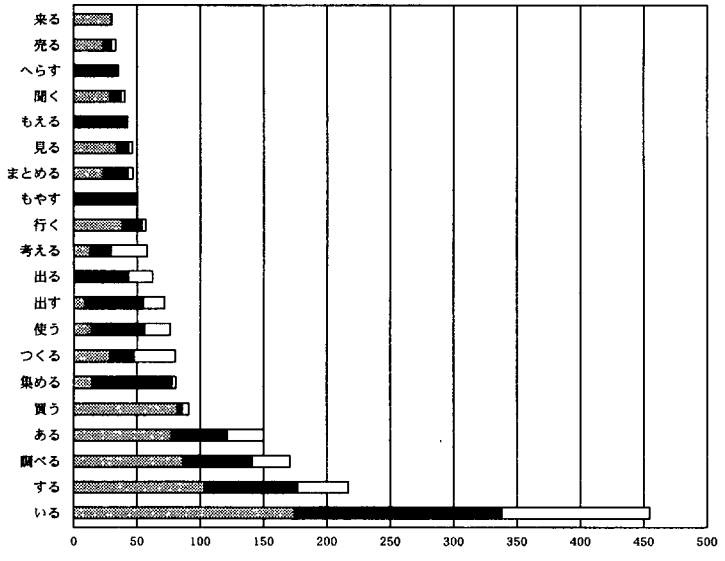
次に丁寧体（「です／ます」体）と普通体の使用についてはどうなっているのだろうか。光村図書４年上『わたしたちのくらしとごみ』の単元では、「わたしたちのくらしからは、毎日いろいろなごみが出ます。どんなごみが家から出されるのか、ごみ日記を１週間つけて、みんなで調べることにしました。」という書き出しになっており、です/ますの形、いわゆる丁寧体が使われている。ところが、「みんなのごみ日記を持ちよって、気がついたことを発表しました。」と児童が調べたことをもちよって発表する段になると「ごみには、もえるものと、もえないものがあるよ。」「台所のごみは、生ごみが多いけど、ラップやトレーも多いわ。」「びんやかんなどのもえないものや新聞紙は、どうするのかな。」と、辞書の形、いわゆる普通体に助詞がついた形が使われている。各教科書ともに、児童の会話体の部分と説明部分では文体が異なり、普通体と丁寧体が両方現れている。

５．動詞の特徴

出現頻度20位までの動詞の種類の内訳は４級レベル13個、３級レベル２個、２級レベル５個になっていて、「いる」「する」「ある」といった基本的な動詞をはじめとして日本語能力試験４級レベルの動詞の出現頻度が多いが、２級、３級レベルの動詞も出現している。学年が高くなるほど、２、３級レベルの動詞が全体に占める割合は増加しているが、３年生だからといって４級レベルの動詞だけで済むというわけではない。

さらに重要なことは、4級レベルの動詞であっても、活用形は、ます形、普通形、て形、受け身形、可能形、意志形等多岐にわたっていることである。「使う」を例にとると、「使える」(15)、「使って」(15)、「使われる」(14)、「使う」(13)、「使い」(7)、「使った」(6)、「使わない」(4)、「使おう」(1)、「使わず」(1) の９つの形が現れている。３級レベルの動詞は「調べる」「考える」の出現頻度が高く、各学年に万遍なく現れている。取り扱う単元に特有の動詞も見られ、２級レベルの動詞では「まとめる」は各学年に出現しているが、「集める」「もやす」「もえる」「へらす」がゴミに関する４年生の単元に集中して出現している。

図２　動詞の出現頻度



出現頻度が多い動詞が児童用の日本語教科書に取り上げられているかどうかを見てみると、教科学習を念頭においた『まなぼう』では20の動詞のうち半分までが第一分冊に、その他も多くは第二分冊、そして１つが第三分冊に取り上げられ、20位までの動詞がすべて網羅されているが、『ひろこさん』のほうでは20の動詞のうちの７つ（「調べる」「集める」「考える」「もやす」「まとめる」「もえる」「へらす」）が未提出である。未提出の動詞のなかで「調べる」「考える」「まとめる」は、学習を進めるためのキイワードであり、各学年に現れている重要語彙である。

次に、「する動詞」について検討する。「する動詞」の出現頻度はさほど高くはない。頻度５回以上の動詞は９つだけで、「発表する」(24)、「しょりする」(17)、「利用する」(12)、「発生する」(11)、「協力する」(11)、「インタビューする」(8)、「しまつする」(8)、「せいりする」(6)、「学習する」(5) となっている。このうち、「発表する」「利用する」「協力する」「学習する」は各学年に見られる。「発生する」は５年生の公害の単元、「インタビューする」は３年生の商店を扱った単元のみ、「しょりする」「しまつする」は４年生のゴミの単元だけに出現している。「する動詞」はほとんどが日本語能力試験２級レベルで、１級の語彙「発生する」「しまつする」も混じっているため、『ひろこさん』には１つも出てこない。『まなぼう』には、第二分冊以降に、６つの語彙が提出されているが、「しょりする」「発生する」「学習する」は未提出である[5]。

ここで、受け身形、可能形についても触れておく。出現頻度はそれほど高くないが、「集められる」「作られる」「使われる」「出される」等の受け身の形、「できる」「買える」「使える」「燃やせる」等の可能形が3、4、5年の各学年の単元に見られる。実際に受け身形と可能形が使われている用例をいくつか見てみよう。

受身形

・食べものは、とくにしなものがつくられた日づけや、つかわれている薬などをよく見て買うことがたいせつです。(文教3年)

・教室からは、どんなごみが出て、どのようにしょりされているかを調べました。(教育4年)

・自然の調和がこわされ、人々の健康がおびやかされることになります。(東京5年)

可能形

・しゅるいのちがうしなものもいっしょに買えるし、大きなちゅう車場があるので、車でも来られるからべんりだね。(教育3年)

・ごみを少なくし、使えるものは何度でも使うために、わたしたちには、何ができるのでしょうか。(光村4年)

・ふだんのくらしの中で努力をすれば、なくすこともできる公害もあるのです。(教育5年)

6. 名詞の特徴

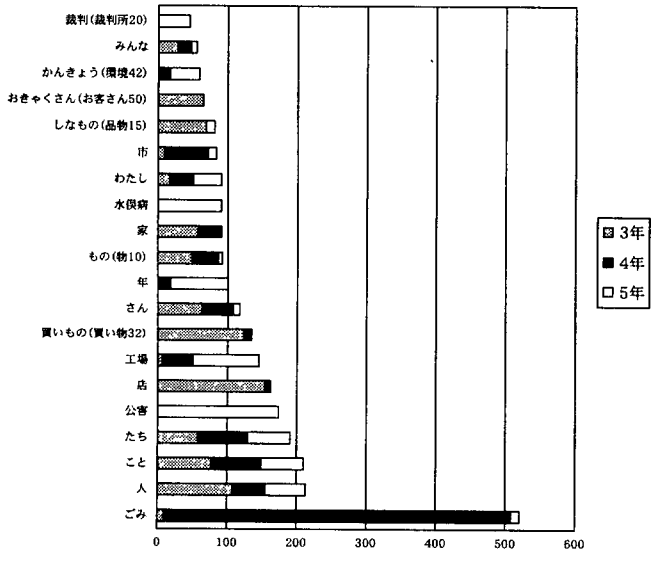
出現頻度上位20位までの名詞は日本語能力試験の語彙レベルでは4級レベルが9個、3級レベルが5個、2級レベルが5個、その他(能力試験出題基準にのっていない)1つとなっている。2級レベルの名詞では「公害」「市」「環境」「裁判」「資源」があがっているが、「市」以外は主として5年生の「公害」の単元に現れる名詞である。

また、出現頻度が20回以上になる上位53位までの名詞について調べると、3年生の教科書には3級、2級レベルの名詞も出現しているが、4級レベルが最も多い。それに対して、4年生の教科書には3級レベルの名詞が最も多く、4級、2級レベルの名詞がそれに拮抗している。5年生の教科書になると2級レベルの名詞が最も多く、だいたい同数が4級レベル、それに、3級レベル、1級レベルの名詞が続いている。動詞と比較すると、名詞は2級、3級レベルの言葉が数多く出現していることがわかる。5年生ともなると2級レベルが最も多い。学年が上がるにつれて言葉が難しくなっているようである。名詞は単元固有のものが動詞より多くなるので、児童用の日本語教科書には出ていないものが多い。

---

5 「する動詞」の多くは2字漢語を用いているが、当該漢字が未習のうちはひらがなで表記されているので、漢字を見て意味を想像する中国語を母語とする児童にとっては、かえって意味がとりにくいことが予想される。実際、前述の筆者が参与観察の対象とした中国人の女の子は、漢字を示すと理解できるという例が数多く見られた。

図３　名詞の出現頻度



７．形容詞（及び形容動詞）、副詞の特徴

形容詞（形容動詞）の出現頻度はあまり高くない。また、種類も限られていて、単元ごとに特殊な語彙も少ない。能力試験のレベルで見ても４級レベルの平易な言葉が多い。ただ、『まなぼう』には出現頻度10位までのすべての言葉が提出されているが、『ひろこさん』には約半分しか提出されていない。未提出のものは「よい」「たいせつ」「便利」「安い」である。

副詞の出現頻度もあまり高くはない。「たくさん」(45)、「よく」(26)、「とても」(11)の上位３位の他は全学年あわせても10回以内の出現頻度である。上位17位までの副詞を見ると、４級レベルが９個と最も多い。量や時を表す表す副詞が多く見られる。『まなぼう』には出現頻度10位までのすべての言葉が提出されているが、『ひろこさん』には「とくに」「すぐに」の２つの副詞は提出されていない。

出現頻度の高い「よく」については、「よく買いものをしている」という回数の多さを表す用法もみられるが、多くは回数の多さよりも以下の用例に見られるような「充分に」という意味の使い方である。

・よい品物かどうか、ひんしつやざいりょうをよく見る。(光村３年)
・よく知っている店が多いからだそうよ。(東京３年)
・見学やインタビューをしたら、よくわかったわ。(教育４年)

図4　形容詞（形容動詞）の出現頻度

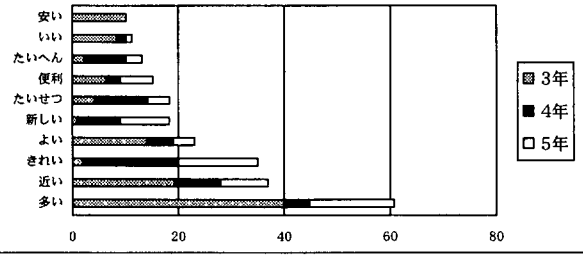
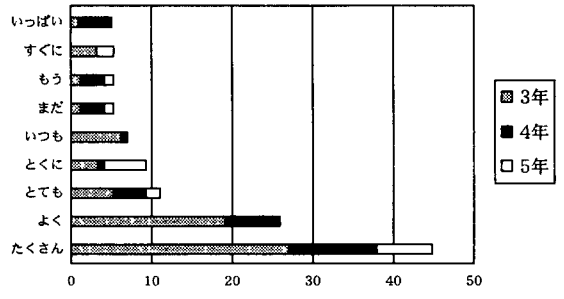


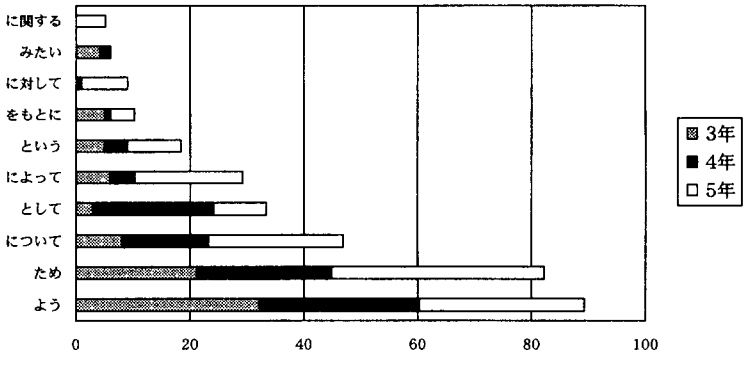
図5　副詞の出現頻度



8．助詞相当句の特徴

助詞相当句とは複合辞とも呼ばれるものの中で、文中で助詞のような働きをするものを言う。助詞相当句自体は３級、２級レベルで、２級レベルが中心であるので、社会科教科書に出現するものも「よう」「みたい」「関する」以外は２級レベルである。

図6　助詞相当句の出現頻度



出現頻度上位10位までの助詞相当句をみると、１位は目的、様態を表す「よう」、２位は目的、理由を表す「ため」があり、出現頻度が高い。

「よう」の目的の用法

・おきゃくさんが買いやすいように、しなものをならべたり、しな切れにならないように、数をしらべてついかしたりしています。（教育３年）

・ごみを集めて運ぶ人たちは、出されるごみがのこらないように、時間や回る道順を決めて、仕事をしています。（光村４年）

「よう」の様態の用法

・八代海南部一帯でも、同じような病気の人が次々とあらわれ（大阪５年）

・次のようにまとめてみました。（教育５年）

「ため」の目的の用法

・お客さんにたくさんきてもらうために、商店会ではどんなくふうをしていますか。（文教３年）

・電気をお年よりのためのしせつで使ったり、電力会社に売ったりしている。（東京４年）

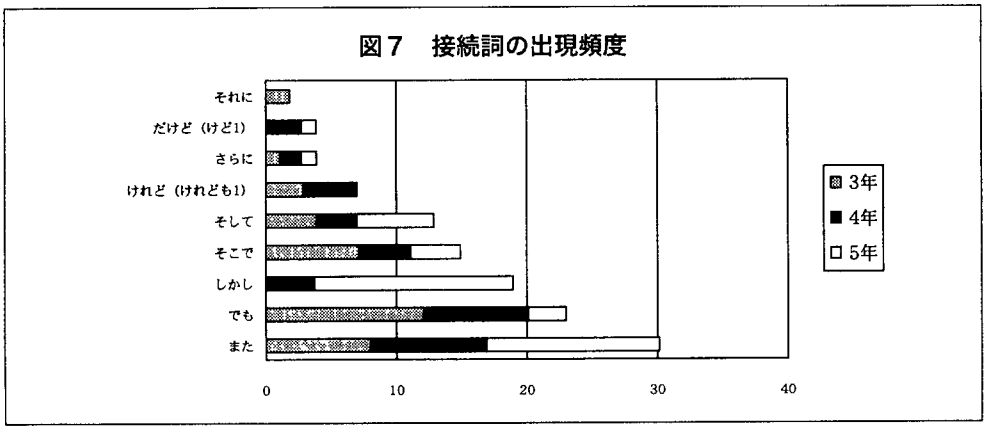
「ため」の原因・理由の用法

・中小工場が地下水を大量に使用したために、土地が下がってしまい、（文教５年）

３位以降は取り扱う対象を表す「について」「に対して」「に関する」、立場を表す「として」、基準、理由を表す「によって」、引用の「という」、基準の「をもとに」、様態の「みたい」があがっている。日本語教科書『ひろこさん』には様態の「よう」「みたい」は提出されているが、それ以外の助詞相当句は見られない。『まなぼう』には２分冊以降、多くの助詞相当句が提出されており、上位10位までのなかで未提出なものは「に関する」のみである。

９．接続詞の特徴

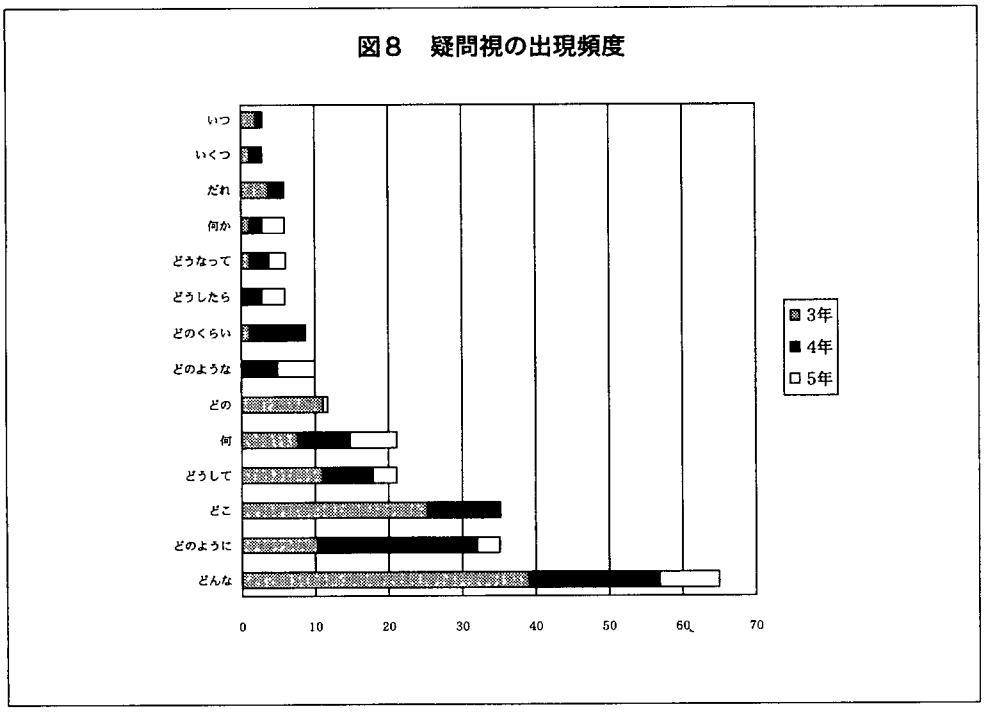
接続詞は、種類も頻度も多くないが、学年、単元によらずに万遍なく出現している。日本語能力試験２級、３級レベルがほとんどを占めている。添加の「また」「さらに」「それに」、逆接の「でも」「しかし」「けれど」「だけど」、順接の「そして」「そこで」が上位９位までの接続詞である。会話体の部分に「でも」「けど」「だけど」といった言い方が現れている。『ひろこさん』には「でも」「そして」が第一分冊に、「けれど（けれども）」が第二分冊に出てきているだけだが、『まなぼう』には「だけど」以外はすべて第二分冊までに提出されている。



10. 疑問詞の特徴

教科書の構成が子供たちが何かに疑問を抱き、それについて調べていくという形をとっている関係上、疑問詞はバリエーションに富んでいる。ここに出現している疑問詞は能力試験４級レベルの語彙または４級語彙とその他の語の連語「どのような／どのように」「どうしたら／どうなって」である。日本語教科書にもほぼすべてが提出されている。ただし、『ひろこさん』には、「どの」は提出されているが、連語「どのような／どのように」「どうしたら／どうなって」は未提出である。

４年、５年の教科書になると、「どんな」のかわりに、「どのような」が使用されている



場合がある。

・せいそう工場は、どのようなはたらきをしているのでしょうか。（東京書籍４年）

・公害を防ぐためにこれまで、どのようなことがおこなわれてきたのだろう。（文教５年）

11. 助詞の特徴

延べ100回以上出現している助詞は図９に示した。概ね各学年に均等に現れている。上位30位までには会話体で使われる助詞「よ」（48）、「ね」（43）、「かな」（35）、「わ」（29）、「な」（22）、「かしら」（14）が、かなりの頻度で出現している。

・「ぼくの家では、野さいやくだものは、駅前商店がいで買うほうが多いよ。」（光村３年）

・再利用の方法や、ごみをへらす方法などを考えているんだね。（大阪４年）

・家での買い物、どうなっているのかな。（光村３年）

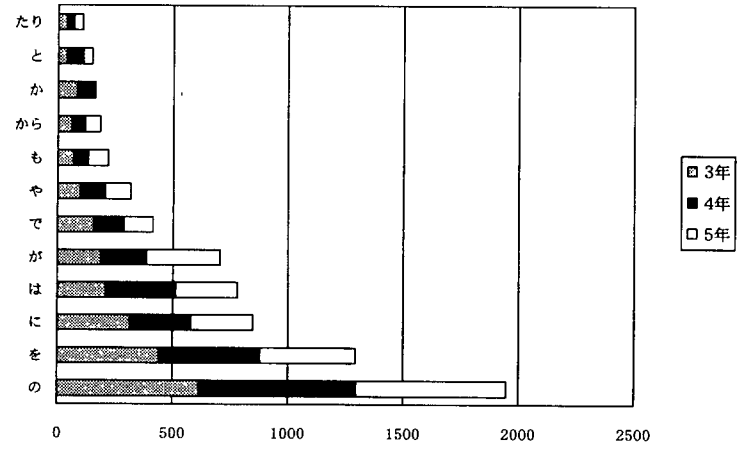
・お母さんが、市の広ほう紙を見ながら、「ごみのしょりにかかる費用が、今年も高くなったわ。」と言っています。（教育４年）

・わたしの家では、１週間でポリぶくろ２こだったけれど、市全体ではどれくらいかしら。（光村４年）

また、複文を構成する接続助詞がかなり多く使用されている。条件を表す「と」「ば」「たら」、原因･理由を表す「ので」「から」、逆接を表す「のに」等の接続助詞は、文章理解にとって重要である。接続助詞「ので」（33）、「と」（48）、「ば」（12）、「たら」（8）、「から」（8）、「のに」（7）の用例を見てみよう。

・大きなちゅう車場があるので、車でも来られるからべんりだね。（教育３年）

図９　助詞出現頻度



・わたしたちは、公害のひ害様子を学習して、公害は、一度起こると、もとにもどすのに多くの費用や年月がかかることを知りました。(教育５年)
・いらなくなったものを、くり返し利用すればごみがへるね。(光村４年)
・もし、仕事をする人がいなかったら、町はごみばかりになってしまうと思う。(大阪４年)
・ほかの店より高いのに、知らずに買った。(東京３年)

助詞にはいろいろな用法があるので、それらすべてを細かく分類してはいないが、100回以上の出現頻度のものの基本的用法は、日本語教科書『ひろこさん』『まなぼう』ともにすべて提出されている。また、上位30位までに出現する助詞は『まなぼう』には、第二分冊までにすべて提出されているが、『ひろこさん』は主に丁寧体で書かれているので、会話体で使われる助詞のなかで、疑問の終助詞「かな」「な」「かしら」が出てこない。

12. 日本語能力試験レベルおよび児童用日本語教科書との対照

語彙・表現の出現頻度と日本語能力試験との関係をここで簡単にまとめてみる。３年生から５年生までの社会科教科書に出現している語彙と表現は、日本語能力試験４級レベルのものが最も多く、次いで多いのが３級レベルであるが、２級、１級レベルのものも見られる。学年と単元が異なっても共通に頻出するものと、単元固有のものがある。共通するものは、学習を進めるためのキイワードとなる語彙、表現であり、文型では「～てくる」「～ていく」「ようにする」「ようになる」「～てみる」「ことにした」といった文末表現、動詞では「調べる」「考える」「まとめる」「発表する」「学習する」が重要な語彙となっている。動詞は４級レベルの出現頻度が多いが、２級、３級レベルの動詞も出現している。学年が高くなるほど、２、３級レベルの動詞が全体に占める割合は増加しているが、４級レベルの動詞でも、活用形は、ます形、普通形、て形、受け身形、可能形、意志形等さまざまな形が出ている。名詞は学年が上がるにつれて難しい言葉が多くなっている。単元固有の特別な語彙が多いからであろう。形容詞(形容動詞)、副詞の出現頻度はあまり高くなく、種類も限られていて、単元ごとに特有な語彙も少ない。助詞相当句は、成人のための日本語教科書では中級レベルになって初めてでてくる２級レベルの語彙が多いが、社会科の教科書には３年生からかなりの頻度で出現している。接続詞は種類も頻度も多くないが、学年、単元によらずに万遍なく出現し、２級、３級レベルがほとんどを占めている。疑問詞はかなりいろいろなものが提出されているが、４級語彙が中心である。助詞に見られる特徴は「よ」「ね」「かな」「わ」「な」「かしら」などの終助詞の出現頻度が高いこと、接続助詞がかなり多く使用されていることである。

次に、児童用の日本語教科書との関係についてまとめてみる。結論から述べると、文型積み上げ式の『ひろこさんのたのしいにほんご』に比べて、教科学習を念頭においた『日本語をまなぼう』には社会科教科書に出現頻度の高い語彙と表現が数多く提出されている

ことがわかった。出現頻度20位までの文末表現は『まなぼう』では、教科書に現れる表現のうち、半数以上が第一分冊に、その他も第二分冊に提出されているが、『ひろこさん』のほうでは第二分冊まで勉強してもすべての文末表現を学習することはできないし、『まなぼう』では出現頻度上位20位までの動詞がすべて網羅されているが、『ひろこさん』では20の動詞のうちの７つが未提出である。助詞相当句については、『ひろこさん』にはほとんど提出されていないが、『まなぼう』には２分冊以降、多くの助詞相当句が提出されている。このような結果から見ると、『日本語を学ぼう』は教科理解のために最適な日本語教科書のように思われるが、『まなぼう』全体との対照で得られた結果であり、そもそも先に述べたように、社会科をとりあげた課は教科書全体のごく一部分であるし、社会科を扱った課では、社会科教科書において出現頻度高く、社会科の教科内容を理解するためのキイワードとなる語彙と表現が、特に提出されているわけではない。

13. おわりに

はじめに述べたように、外国人児童は日本語だけを学習していればよいというわけではなく、日本語学習を進めながらも、並行して各教科の学習も進めていかなければならないのである。もちろん、両者は必ずしも個別に進めるべきだと考える必要はない。中尾(1999)は小学校の教科書の構文調査の結果「教科、学年により、文末表現から見た構文の使用に変化が見られること」を指摘し、「教科別にシラバスを組むことは、学習用日本語指導のためには有効な手段であると言える。」と述べている。筆者も各教科の内容に応じた語彙と表現を使ったテキストづくりが必要であると考える。

たとえば、中国帰国者定着促進センターでは、算数という教科を利用した日本語教育が行われている（斉藤ひろみ　1998、1999)。とするなら、社会科教育についても教科教育と日本語教育を連動させる指導法の開発が可能だろう。『日本語をまなぼう』のような教科内容に即した日本語教科書を作成することは重要であるが、その際、実際の教科書の分析を行うことによって、各教科の学習を進めるうえで、重要な語彙、表現をできるだけ多く採用する必要がある。今回は３、４、５年生のごく一部の単元をとりあげたが、今後は全般的な基礎的調査をすすめるとともに、他の要因も勘案して、教科学習を円滑に進めるために効果的な日本語教材の開発に取り組んでいきたい。

（本研究は、一部、平成10・11年度科学研究費補助金（奨励研究Ａ課題番号10780140）を受けている。）

【参考文献】

斉藤ひろみ(1998)「内容重視の日本語教育の試み　―小学校中高学年の子供クラスにおける実践報告―」『中国帰国者定着促進センター紀要』６号

斉藤ひろみ（1999）「教科と日本語の統合教育の可能性　ー内容重視のアプローチを年少者日本語教育へどのように応用するかー」『中国帰国者定着促進センター紀要』７号
東京外国語大学留学生教育センター（1998）『外国人の児童生徒のための日本語指導　第２分冊　ー算数（数学）・理科の教科書ー語彙と漢字ー』
中尾佳子（1999）「小学校検定教科書の構文調査　ー外国人児童の教科学習支援のための基礎研究ー」『小出記念日本語教育研究会論文集』７
中島和子（1998）『言語と教育』（財）海外子女教育振興財団
文部省（1994）『日本語をまなぼう２　教師用指導書』ぎょうせい
文部省（1996）『海外子女教育の現状』

【調査対象】 1999年度検定教科書
（東京３年）『新編　新しい社会３上』東京書籍　３章　わたしたちのくらしと商店
（光村３年）『社会３上』光村図書　３章　こんにちは、おみせやさん
（文教３年）『小学生の社会３上』日本文教出版株式会社　３章　わたしたちのくらしと商店がい
（教育３年）『社会３上』教育出版　２章　市のひとたちの買いもの
注：『小学社会３年上』大阪書籍には買い物、商店に関する章がなかったので除外した。
（東京４年）『新編　新しい社会４上』東京書籍　１章２節　ごみと住みよいくらし
（光村４年）『社会４上』光村図書　１章２節　わたしたちのくらしとごみ
（文教４年）『小学生の社会４上』日本文教出版株式会社　１章２節　市のごみをへらす運動
（教育４年）『社会４上』教育出版　１章１節　ごみはどこへ
（大阪４年）『小学社会4年上』大阪書籍　１章１節　くらしとごみ
（東京５年）『新編　新しい社会５上』東京書籍　２章４節　これからの工業と環境
（光村５年）『社会５上』光村図書　２章４節　工業生産と公害
（文教５年）『小学生の社会５上』日本文教出版株式会社　２章４節　公害を防ぐ
（教育５年）『社会５上』教育出版２章３節　公害をふせぐ努力
（大阪５年）『小学社会５年上』大阪書籍　４章４節　工業の発達と公害の問題

国際交流基金他（1994）『日本語能力試験出題基準』凡人社
根本牧、屋代瑛子（1986）『ひろこさんのたのしいにほんご　１』凡人社
根本牧、屋代瑛子、永田行子（1995）『ひろこさんのたのしいにほんご　２』凡人社
文部省（1992）『にほんごをまなぼう　教師用指導書』ぎょうせい
文部省（1994）『日本語をまなぼう２　教師用指導書』ぎょうせい
文部省（1995）『日本語をまなぼう３　教師用指導書』ぎょうせい